

他者との関連における“自己”

—パーソナリティ認知様式に関して—

藤 井 洋 子

(心理学研究室)

“Self” in Relation to Others: on the Congruency Types of Personality Perception

Yoko FUJII

問 題

1)
Frommは、自己を他者との関連において把握し、他者のみならず自分自身が自己の感情や態度の対象であり、他者に対する態度と自己に対する態度とは根本的に連結したものであり、決して矛盾するものではないという心理学的前提をうちだしている。

本研究の目的は、他者とのかかわりの中で機能する“自己”の要因を、とくにパーソナリティ認知の過程に関して検討することである。具体的には、「個人の認知的環境内において、いささかとも不安定な関係にある対象に対しては、意識的あるいは無意識的に、より安定した認知的環境を再構成していこうとする種々の認知過程が存在する」という大前提のもとに、対人関係適合化の1方途として、浜名により提唱された“仮定された自己志向性現象”²⁾³⁾⁴⁾をとりあげる。この現象は、「個人は、自分が好意をいだいている相手からは、好意をいだかない相手からよりも、自己のパーソナリティについての認知内容とより一致するようにみられていると仮定する」⁵⁾⁶⁾⁷⁾顕著な傾向として確認されている。すなわち、パーソナリティ認知過程と対人感情の関連を、“他者によってみられていると思う自己のパーソナリティ内容”という認知要素を導入することから解明しようとするもので、他者との関連における自己が強調されている。

浜名は、“仮定された自己志向性現象”を対人感情の規定因として位置づけ、その生起過程において、“自己のパーソナリティについての認知内容”に“他者によってみられていると思う自己のパーソナリティ内容”を従属させる方向で認知的安定を得る“投射的一致過程”と、逆に前者を後者に従属させて認知的再構成を行なう“投入

的一致過程”という2方向の一致過程が併存することを実証している。そして、その生起機制は、個人が自己に認知するパーソナリティ内容の肯定的・受容的側面や否定的・拒否的側面などの内容的条件にかかわらず、個人間に生起機制の相違にもとづく個人の類型化ができるような機制であるという観点から、4類型を分類している。それは、他者との関連において個人が認知的に安定性を獲得するために、方向にかかわらず“自己のパーソナリティについての認知内容”と“他者によってみられていると思う自己のパーソナリティ内容”の一致を志向する型(投射・投入型; P I型)、方向選択的にいずれか一方でのみ一致を志向する型(投入型; I型、および投射型; P型)、認知的に不安定な状態を受容し、一致を志向しない型(不一致型; N型)の4類型である。さらに、その類型間の相違が社会的動機づけの側面から検討されており、TAT方式でとらえられる対人連合動機において、P I型とI型は高く、P型とN型は低い、また、FIRO-Bテストでとらえられる基本的対人関係志向において、P型は他者に統制・支配されるより、むしろ他者を統制・支配したいという欲求志向を示し、I型は他者に包括されたいという欲求志向をもつことが明らかにされている。このことから、P型の個人は他者とのかかわり合いのなかで自己をきわだたせようとする型の個人であり、I型の個人は逆に他者とのかかわり合いのなかで自己を埋没ないし融合させようとする型の個人であることが示唆されている。

本研究では、さらに、多面的な社会的動機づけの側面において類型差を把握することを目的としており、具体的に検討しようとするのは、つぎの三つである。

1. “個人が最も好意的感情をいだいている他者”と

のあいだで、“仮定された自己志向性現象”が生起する場合、“投射的一致過程”および“投入的一致過程”という方向の異なる二つの生起機制が認められるか。

2. その場合、生起機制の相違にもとづいて、個人を類型化 (PI型、I型、P型、N型) することができるか。

3. 個人の類型化に成功した場合、社会的動機づけ (social motivation) の側面において、どのように類型差を説明できるか。

方 法

〈対象〉 高校1年生女子2集団、計 106名。

〈テスト〉 1. パーソナリティ認知テスト…12個のパーソナリティ特性を与え、つぎの3種類 (A、B、C) の側面に関して、それぞれ最も適すると思う順に1位から12位まで順位づける。

なお、この場合、他者とは“個人が最も好意的感情をいんでいる他者”であり、個人によって異なる。

- A. 自己のパーソナリティの認知 (S-S'順位づけ)
- B. 他者のパーソナリティの認知 (S→O'順位づけ)
- C. 他者によってみられていると思う自己のパーソナリティの認知 (S<O'順位づけ)

2. EPPS (Edwards Personal Preference Schedule) …社会的動機づけ (15特性) の測定。

3. 不安傾向診断テスト (GAT)

以上のテストは、実験的操作のなかで実施したが、パーソナリティ認知テストB (他者のパーソナリティの認知) および不安傾向診断テスト (GAT) は、操作のうえで必要としたものであり、本研究の分析資料としては用いていない。

なお、使用したパーソナリティ特性は、⁸⁾ 塗師の対人形容語構造にもとづいて構成したもので、すべて価値的に正の属性であり、パーソナリティ特性自体において、社会的望ましき (social desirability) の統制を行なっている。すなわち、リーダーシップのある・情熱的・意志の強い・のんきな・活発な・従順な・積極的・臨機応変な・きちょうめんな・ひかえめな・冷静な・落ち着いた、の12特性である。

〈実験操作手続〉 個人が、“自己に認知するパーソナリティ内容、S-S'”と“他者によってみられていると思う自己のパーソナリティ内容、S<O'”とを一致させる場合、投射的一致過程および投入的一致過程の二つの方向を選択的にとり得るような実験事態を設定した。具体的には、以下の実験手続によった。

1. 第1情報操作前テスト: 1) S-S'順位づけ 2) S→O'順位づけ 3) S<O'順位づけ 4) GAT

2. 第1情報操作 (S-S'順位操作): 各被験者のS-S'順位に変動をもたらすために、第1情報操作前テスト1)のS-S'順位で第11位の特性を上昇操作特性とし、つぎのような実験的教示 (プリントおよび口頭説明) によって、S-S'順位の第2位へ上昇させるように操作した。

自分がどのような性格であるかを客観的に知ること、あなたが健全な人間関係を送るためにきわめて重要なことです。あなたはどのくらい自分のことを正しく理解しているでしょうか。先日の性格テストをもとにして科学的に分析した結果、あなたの性格はつぎのようであることがわかりました。

1.情熱的 2.活発な……11.従順な 12.冷静な

なお、上昇操作特性以外の特性順位は、操作の前後において相対的に同じである。

3. 第1情報操作後テスト (第2情報操作前テスト): 第1情報操作の検討と結果の分析、さらに第2情報操作のために、つぎのテストを実施した。1) EPPS (15分) 2) S-S'順位づけ 3) EPPS (10分) 4) S<O'順位づけ 5) S→O'順位づけ

4. 第2情報操作 (S<O'順位操作): 各被験者のS<O'順位に変動をもたらすために、第2情報操作前テスト4)のS<O'順位が第11位の特性を上昇操作特性とし、つぎのような実験的教示 (プリントおよび口頭説明) によって、S<O'順位の第2位へ上昇させるように操作した。

自分の性格を他の友だちがどうみているかを知ることは、あなたが健全な人間関係を送るために、きわめて重要なことです。あなたはどのくらい他の友だちのあなたに対する気持を予測できるでしょうか。先日のテストの結果「」さんは、あなたのことをつぎのような性格だとみえています。

1.情熱的 2.活発な……11.従順な 12.冷静な

なお、S-S'順位操作の場合と同様に、上昇操作特性以外の特性順位は、操作の前後において相対的に同じである。

5. 第2情報操作後テスト; 第2情報操作の検討と結果の分析のために、つぎのテストを実施した。1) EPPS (15分) 2) S<O'順位づけ 3) EPPS (10分) 4) S-S'順位づけ 5) S→O'順位づけ

以上が実験操作手続であるが、情報の信頼性を確保するために極端な操作は避け(第11位→第2位)、また、操作手続上の統制を目的として被験者を学級単位で2群(Group 1・Group 2)に分けた。すなわち、Group 1の手順は、1→2→3→4→5であり、Group 2の手順は、1→4→5→2→3である。この2群は、S-S'順位操作とS<O'順位操作の順序が時間的に逆行していることを除いて、他の操作内容は変わらない。

なお、EPPSは225項目にわたっているが、各手続内での時間配分に合わせ、実験者側で適当に区切って実施した。また、S→O'順位づけおよびS<O'順位づけにおける“個人が最も好意的感情をいだいている他者”は、各被験者が第1情報操作前テスト2)であげた他者の氏名を第1情報操作後テスト以降のテスト用紙にあらかじめ実験者側で記入しておいた。

〈実験時期〉 1971年10月下旬～11月上旬

結果 および 考察

1. 実験的操作の検討

情報操作の成功、不成功について、すなわち、各被験者がS-S'順位およびS<O'順位に変動をもたらすために与えられた情報を受容し、自己に関するパーソナリティ認知内容を情報にそって再構成したか否かについての検討は、つぎのような基準によった。各被験者において、2種類の情報操作における操作前テストと操作後テストの上昇操作特性(操作前テストにおいて第11位に位置する特性)を比較し、それぞれの情報操作後テストで上昇操作特性のしめる順位が、情報操作前テストの順位よりも2段階以上変動しているか否かによって、「成功群」、「一部成功群」、「失敗群」の3群を分類した。変動基準を2段階以上としたのは、実験的操作を直接に受けない統制特性(原則として、情報操作前テストにおいて第10位に位置する特性)の順位が、間接的に最低1段階の変動を示す可能性があるからである。なお、統制特性については3群ともに操作の前後で順位変動を示していないものを対象としており、「成功群」は操作特性が2種類の情報操作において上昇方向に変動を示し、「一部成功群」においては操作のいずれか一方のみに上昇変動が示され、「失敗群」はいずれにおいても上昇変動がみられなかった被験者群である。以上の3群をもって実験的

操作の検討をしたものが表1である。

表1 実験的操作の検討

S _s	一部成功群			計	検 定
	成功群	一部成功群	失敗群		
G ₁	25	13	4	42	$x^2=15.86$ $df=2$ $P<.001$
G ₂	27	14	2	43	$x^2=21.82$ $df=2$ $P<.001$
計	52	27	6	85	$x^2=37.44$ $df=2$ $P<.001$

表1より、実験的操作は十分成功しているといえる。しかも、実験的操作手続上の問題であったS-S'順位操作とS<O'順位操作の時間的逆行にもかかわらず、Group 1・Group 2ともに操作が成功している。

なお、対象者106名のうち、12名は資料不備のため、また、9名は統制特性を決定することができなかったために検討対象から除外した。

2. 投射的一致過程と投入的一致過程の検討

表1における「成功群」、すなわち、Group 1の25名およびGroup 2の27名、計52名について、S-S'順位における操作特性の上昇変動に伴うS<O'順位の変動(投射的一致過程)と、その逆過程であるS<O'順位における操作特性の上昇変動に伴うS-S'順位の変動(投入的一致過程)の2過程を検討したものが表2と表3である。

表2 投射的一致過程の検討

S _s	変 数	変 動 方 向			計	検 定
		上昇	不変	下降		
G ₁	操作特性	17	8	0	25	$x^2=20.60$ $df=2$ $P<.001$
	統制特性	3	12	10	25	
G ₂	操作特性	16	8	3	27	$x^2=12.16$ $df=2$ $P<.001$
	統制特性	4	13	10	27	
計	操作特性	33	16	3	52	$x^2=31.44$ $df=2$ $P<.001$
	統制特性	7	25	20	52	

表3 投入的一致過程の検討

S _s	変 数	変 動 方 向			計	検 定
		上昇	不変	下降		
G ₁	操作特性	14	8	3	25	$x^2=9.36$ $df=2$ $P<.001$
	統制特性	4	12	9	25	
G ₂	操作特性	16	7	4	27	$x^2=12.16$ $df=2$ $P<.001$
	統制特性	4	18	5	27	
計	操作特性	30	15	7	52	$x^2=20.07$ $df=2$ $P<.001$
	統制特性	8	30	14	52	

表2と表3に明らかなように、“個人が最も好意的感情をいだいている他者”とのあいだで、“自己のパーソナリティについての認知内容”と“他者によってみられていると思う自己のパーソナリティ内容”の二つの認知

内容を個人が一致させる場合、後者を前者に従属させて認知的再構成を行なう投射的一致過程と、逆に、前者を後者に従属させる投入的一致過程という方向の異なる生起機制が併存する。しかも、操作上の時間的逆行にもかかわらず、Group 1・Group 2ともに“仮定された自己志向性現象”が生起していることがわかる。

3. “仮定された自己志向性現象”の生起機制の相違にもとづく個人の類型化

表2と表3において、「上昇」に属する個人をその過程を選択したものとみなし、「不変」および「下降」に属する個人は、その過程を選択しなかったものとみて、個人を単位とする“仮定された自己志向性現象”の存否および生起過程の相違により、個人の類型化を試みたものが表4である。

表4 生起機制の相違にもとづく類型化

類型	N	投射的一致過程		投入的一致過程	
		操作的 S-S順位	結果的 S-O順位	操作的 S-O順位	結果的 S-S順位
PI型	23	+	+	+	+
I型	7	+	-	+	+
P型	10	+	+	+	-
N型	12	+	-	+	-

注) +; 上昇変動, -; 不変・下降変動

これより、認知的安定性を獲得するため、投射的過程および投入的過程の二つの方向において“自己のパーソナリティについての認知内容”と“他者によってみられていると思う自己のパーソナリティ内容”との一致を志向する型(投射・投入型; PI型), 方向選択的にいずれか一方でのみ一致を志向する型(投入型; I型, および投射型; P型), 認知的に不安定な状態を受容し、一致を志向しない型(不一致型; N型)の4類型を得た(表4)。

4. 類型と社会的動機づけ (social motivation)の関連

多面的な社会的動機づけの側面において類型間の相違をとらえるために、EPPS (Edwards Personal Preference Schedule) を用いたが、15特性(達成, 追従, 秩序, 顯示, 自律, 親和, 内面認知, 求護, 支配, 内罰, 養護, 変化, 持久, 異性愛, 攻撃)について、内容的に同じ方向にあるものをグルーピングして、各類型差を比較、検討する目的で、本実験の対象者(高校1年生女子 106名)におけるEPPS 15特性間の相関係数にもとづいて因子分析(主軸法)を試みた(表5)。なお、因子抽出は、各因子の固有値が1以下になるところで打ち切っている。

表5 因子行列

動機づけ	因子					共通性
	F ₁	F ₂	F ₃	F ₄	F ₅	
達成	.115	.557	.598	-.012	-.089	.6891
追従	.448	-.071	.382	-.101	.587	.7064
秩序	.658	.275	.341	.171	-.140	.6737
顯示	-.473	-.013	.316	.346	.020	.4439
自律	-.203	.683	-.378	.162	.079	.6831
親和	.326	-.467	-.162	.289	-.488	.6723
内面認知	.583	-.032	-.290	-.081	.077	.4375
求護	-.267	-.606	.418	-.071	-.035	.6195
支配	-.197	.138	-.058	-.774	-.401	.8211
内罰	.711	-.194	-.342	-.027	.235	.7161
養護	.298	-.649	-.206	.028	.072	.5584
変化	-.651	.133	-.214	.417	-.085	.6684
持久	.546	.573	-.049	-.015	-.169	.6576
異性愛	-.686	-.347	.067	-.158	.061	.6242
攻撃	-.607	.295	-.278	-.156	.361	.6874
寄与率	24.156	16.502	9.602	7.364	6.767	.6439

表5の第I因子と第II因子(全体の寄与率41%を説明)に関して直交回転を行ない、その結果、四つの象限にプロットされた各特性について(表6), 因子負荷量の絶対値が.5以上の特性をそれぞれの象限を代表するものとして選択し、社会的動機づけに関する四つのカテゴリーを得た(図1)。

表6 回転後の因子行列(I・II)

動機づけ	I	II
達成	-.123	.555
追従	.438	.119
秩序	.487	.521
顯示	-.426	-.206
自律	-.465	.540
親和	.489	-.292
内面認知	.545	.210
求護	.005	-.662
支配	-.236	.045
内罰	.728	.115
養護	.538	-.470
変化	-.648	-.146
持久	.263	.746
異性愛	-.483	-.598
攻撃	-.675	.020

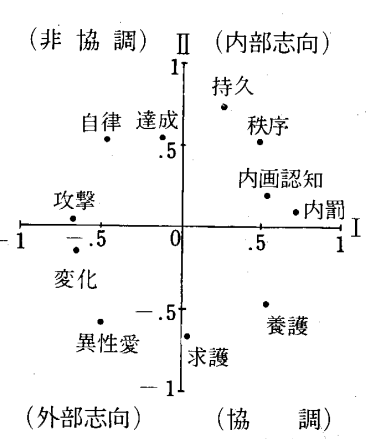


図1 グルーピング

図1より、第1象限と第3象限および第2象限と第4象限は、比較的对立する特性群である。すなわち、物事に対して計画的、分析的で持久力があり、自己責任に敏感な内部志向的特性群（第1象限）に対して、物事を比較的表面的に把握し、その場その場を楽しんでいく外部志向的特性群（第3象限）、一方、他者とは異なったことを自己の思いどおりに行動し、それをはばむものがあれば排撃していくような非協調的特性群（第2象限）に対して、互いに助けあうことを望む協調的特性群（第4象限）の4カテゴリーを分類した。各カテゴリーと各類型の関係は、表7に示すとおりである。なお、各カテゴリーにおけるT得点は、各個人ごとにそのカテゴリーに含まれる特性を平均し集計、処理したものである。

表7 各類型・各動機づけにおける得点

類 型	N	動 機 づ け			
		内部志向	非 協 調	外部志向	協 調
PI型	23	52.39 (5.64)	47.86 (7.09)	51.33 (7.32)	47.43 (7.20)
I 型	7	46.79 (5.29)	46.95 (3.97)	55.07 (4.92)	55.21 (3.02)
P 型	10	50.28 (6.22)	47.77 (4.87)	55.25 (9.31)	45.80 (5.85)
N 型	12	46.52 (7.57)	50.06 (5.47)	55.75 (6.97)	49.96 (5.88)

注) セル内は平均値, ()は標準偏差

表8 表7にもとづく分散分析表

変 動 因	SS	df	MS	F
全 個 体 間	451.48	51		
類 型 (A)	49.03	3	16.34	1.95
個人差 (C)	402.45	48	8.38	
全 個 体 内	10257.03	156		
動機づけ (B)	919.43	3	306.48	5.30**
A × B	1010.39	9	112.27	1.94*
B × C	8327.21	144	57.83	
全 体	10708.51	207		

*P<.05 **P<.01

表7の結果にもとづいて分散分析を試みた表8から、類型と社会的動機づけの両要因間に5%水準の交互作用が認められたため、まず、社会的動機づけの相違を各類型別に検討した。その結果、四つの類型のすべてに有意差が認められた。I型における真の差は、協調や外部志向が非協調や内部志向より強い(P<.01)というところに示され、N型では外部志向が内部志向より強く(P

<.01), PI型では内部志向が協調より(P<.05), さらにP型では外部志向が協調や非協調より強い(P<.05)というところに真の差が認められた。また、類型差を各社会的動機づけ別に検討した結果、外部志向および非協調においては類型差はみられなかったが、協調と内部志向に有意差がみられた。協調における真の差は、I型がP型やPI型より強く(P<.01), 内部志向における真の差は、PI型がN型やI型より強い(P<.05)というかたちで示された。

なお、グルーピングの段階で分析対象から除外された四つの動機づけ(追従, 顕示, 親和, 支配)について分散分析を試みたが、いずれの動機づけにおいても類型差は認められなかった。

以上の結果にもとづいて、社会的動機づけの側面から四つの類型(PI型, I型, P型, N型)についての解釈を試みるとつぎのとおりである。まず、I型の個人は、自己のパーソナリティに関する他者からの認知についての情報(S-O'順位操作)に接し、“他者によってみられていると思う自己のパーソナリティ内容”に従属させるかたちで“自己のパーソナリティについての認知内容”を再構成したのは、自己の内部における認知的不一致の解消欲求が強いというよりも、このタイプの個人にあっては、他者(本研究の場合、“個人が最も好意的感情をいんでいる他者”)という要因が極めて重要な位置をしめており、そうした要因に影響された仕方に対人関係を適合状態に保とうとする欲求が強いと考えられる。このことは、具体的に、内部志向的動機づけが低く、外部志向的動機づけが高いこと、また、非協調的動機づけよりも、他者とともに協調的に歩んでいくような動機づけが強く、他の類型と比較した場合でも、P型やPI型の個人よりも協調的動機づけが高いことから把握できる。つぎに、N型の個人は、他者との関連において認知的不一致が生じていても、それをあまり気に留めず、関心はいたって外部に向っているタイプの個人である。これは、外部志向的動機づけが内部志向的動機づけよりも強く、また、PI型の個人に比して、内部志向的動機づけが有意に低いことから理解できよう。さらに、PI型の個人は、I型の個人に比較すれば、協調的動機づけは低く、とくに他者との関係をうまくやっいていこうとする積極的な姿勢は認められないが、I型・N型の個人に比して、内部志向的動機づけが有意に強い。これは、認知的不一致の状態に敏感で、即座に認知的再構成をはかるタイプの個人であることを意味している。最後にP型の個人は、外部志向的動機づけが強く、I型の個人に比して、協調的動機づけは低く、自己の内部にしめる他者の地位は低

いことが予想される。

本研究結果は以上のとおりであるが、浜名の研究結果⁹⁾で示された類型差との比較検討を若干試みてみよう。ただし、使用された社会的動機づけの測度そのものが異なっているため、直接的な比較は行ない得ない。まず、浜名¹⁰⁾がT A T方式によってとらえた対人連合動機と、本研究でとりあげた協調的動機について、前者では、P I型やI型はP型やN型よりも高かったのに対して、後者では、I型はP型やP I型よりも高いという結果が得られた。つまり、浜名が予想外な結果であるとしたI型とP型の差が協調的動機においてもみられ、さらに対人連合動機では認められなかったI型とP I型の差が本研究では認められた。協調的動機づけにおけるI型とP I型の差について考えられることは、I型の個人が“仮定された自己志向性現象”を生起させるのは、“他者”という要因がきわめて重要で、他者との協調を重要視するためであるが、P I型の個人における認知的再構成は、認知的不一致を避けたいためのものであり、I型の個人のように他者との協調をとくに望むための再構成ではないという点での相違である。また、I型とP型の差については、I型の個人において認められない外部志向的動機づけと協調的動機づけの差がP型に認められており、P型の個人は外的関心が強く、さらに、投射的および投入的一致過程の個々の意味あいを考え合わせれば、I型はとくに“他者”を重要視し、P型はとくに“自己”を重要視するという点での相違を認め得る。なお、浜名¹²⁾は、F I R O-Bテストで把握される基本的対人志向の側面で、P型は他者に統制・支配されるより、むしろ他者を統制・支配したいという欲求志向を示し、I型は他者に包括されたいという欲求志向をもつことを明らかにしたが、本研究では、この点に関する明確な結果は得られていない。

以上、社会的動機づけの側面からとらえられる類型間の相違¹³⁾について、浜名の研究結果との比較検討を試みたが、本研究結果から示唆されることは、社会的動機づけの側面から類型差を考えるにしても、単一の動機ではなく、複数の動機が相互にからみあった結果の類型差であるということである。

さらに、本研究では、“個人が最も好意的感情をいっている他者”とのあいだに認められる“仮定された自己志向性現象”の生起機制の相違にもとづく類型間の相違を検討したが、継時的実験計画により、同一個人内における“個人が最も非好意的感情をいっている他者”とのあいだの生起機制を確認する方向での興味もたれる。すなわち、認知的不一致の状態にとくに耐え得ないP I型の個人は、“個人が最も非好意的感情をいっ

ている他者”に関する比較的“仮定された自己志向性現象”を生起させやすいであろうし、逆に認知的不一致の状態をとくに気につけないN型の個人は、やはり生起させない傾向をもつことが予想され、より明確な類型差の把握が期待できる。

要 約

本研究の目的は、他者とのかかわりの中で機能する“自己”の要因を、とくにパーソナリティ認知過程において検討することにある。そのため、“個人が最も好意的感情をいっている他者”に関して、“仮定された自己志向性現象”が生起する場合、投射的および投入的一致過程の2方向の生起機制が併存することを確認し、その生起機制の相違による個人の類型化を試み、さらに類型差を社会的動機づけの側面において検討した。

高校1年生女子106名を対象として、同一個人が2方向の一致過程を選択的に取り得るような実験事態を設定し、“自己のパーソナリティについての認知内容”および“他者によってみられていると思う自己のパーソナリティ内容”に関する情報操作を行ない、一方の認知内容に変動をもたらす、他方の従属的な変動を検討する実験手続をとった。なお、社会的動機づけの測度としては、E P P Sを用いた。

おもな結果は、以下のとおりである。

1. “個人が最も好意的感情をいっている他者”とのあいだで、“仮定された自己志向性現象”が生起する際、“投射的一致過程”および“投入的一致過程”という方向の異なる生起機制が明らかに併存する。

2. 投射的・投入的のいずれの方向でも“自己のパーソナリティについての認知内容”と“他者によってみられていると思う自己のパーソナリティ内容”との一致を志向する型(P I型)、方向選択的にいずれか一方でのみ一致を志向する型(I型・P型)、認知的に不安定な状態を受容し、一致を志向しない型(N型)という生起機制の相違にもとづく四つの類型を分類できる。

3. P I型・I型・P型・N型の類型差を社会的動機づけの側面において、つぎのように説明できる。

1) 類型内における社会的動機づけの側面から

a. I型において、協調や外部志向的動機づけが、非協調や内部志向的動機づけよりも強い。

b. N型において、外部志向的動機づけが内部志向的動機づけよりも強い。

c. P I型において、内部志向的動機づけが協調的動機づけよりも強い。

d. P型において、外部志向的動機づけが協調や非協調的動機づけよりも強い。

2) 類型間における社会的動機づけの側面から

a. 協調的動機づけにおいて、I型はP型やPI型よりも強い。

b. 内部志向的動機づけにおいて、PI型はN型やI型よりも強い。

〈付記〉本研究をまとめるにあたり、終始ご指導いただいた広島女子大学浜名外喜男助教授、本学武衛孝雄教授に深く感謝いたします。

文 献

1) Fromm, E. 谷口隆之助・早坂泰次郎(訳) 1947 人間における自由. 創元社.

2) 浜名外喜男 1968a パーソナリティ認知過程の対人感情に及ぼす効果—“仮定された自己志向性現象”について—. 広島女子大学紀要, 3, 58-72.

3) 浜名外喜男 1968b パーソナリティ認知過程における“仮定された自己志向性”が対人感情に及ぼす効

果. 教社心研, 8, 1, 77-86.

4) 浜名外喜男 1969 パーソナリティ認知過程における“仮定された自己志向性現象”の生起機制—自然変動分析による研究—. 広島女子大学家政学部紀要, 4, 30-38.

5) 浜名外喜男 1970a “仮定された自己志向性現象”の生起機制—好意的感情をよせる他者に関して—. 教社心研, 9, 1, 51-60.

6) 浜名外喜男 1970b “仮定された自己志向性現象”の生起機制—非好意的感情をよせる他者に関して—. 広島女子大学家政学部紀要, 5, 32-43.

7) 浜名外喜男 1972 パーソナリティ認知様式における投射型と投入型—社会的動機づけの側面から—. 広島女子大学家政学部紀要, 7, 7-17.

8) 塗師 斌 1969 対人態度における価値的認知と感情. 教心研, 17, 3, 16-27.

9) 浜名外喜男 1972 前掲書

10) 同 上

11) 同 上

12) 同 上

13) 同 上

(昭和50年1月9日受理)